

31

## 尼瀬の刃物名工 鳥井代五郎則安

岩原 良晴

株式会社大塚製薬工場 信頼性保証本部 輸液DIセンター

古より出雲の国は中国山地からもたらされる真砂鉄と豊かな森林に恵まれ、これらを用いたたたら製鉄によって良質な鉄（銚、鋼）を産する地であった。この地域で生産された鉄鋼類は日本海に面した安来港に集められ、北前船によって各地に輸送された。1862（文久2）年、雲州松江天神町の慶助に荷請された多種多量の品々が越後国三島郡出雲崎湊の回船問屋 多助の下に積み下ろされ、その中で鋼や鉄は、出雲崎、尼瀬、柏崎、三条等の買請人を経て各地の鍛冶職人の手に渡っていった。

江戸時代後期、出雲崎に隣接する尼瀬の稲荷町に喜左エ門則安という、近国に及ぶ人がない腕前の刃物の名工がいた。1868（慶応4）年戊辰戦争の際に官軍の上官に認められ、数名の弟子を連れて野戦大病院（柏崎軍病院）へ出仕し、更には高田軍病院まで随行したとされている。12月に暇を得て郷里へ帰る時、勤労の賞として名字帯刀が許され、その後鳥井代五郎と名のようになったと考えられる。

1881（明治14）年に開催された第二回内国勲業博覧会において、鳥井代五郎は眼科器械、産科器械と共に、硝子と銀で製作した皮下注射器（皮下注入器）を出品し、「銅鐵鍛錬能ク熟シ製作良巧研磨亦精用ニ適スルヲ観ル但刀類ノ中不可ナルアリト雖モ剪刀鑷子ノ如キハ各開闔度ニ協ヘリ其有功嘉賞ス可シ」と評され、三等有功賞牌を受けている。同じ博覧会において、京都の佐々木治兵衛は、多種にわたる外療器の中に、銅で製作した皮下注入器を出品している。1）彼らが同じ時期に皮下注射器を製作していたこと、2）代五郎を名のる前から則安と称していたことから、当時京都において華岡流外科道具の製作を行っていた外療道具師 真龍軒安則（6代 佐々木治兵衛）の技を伝授した相弟子であったと推測される。

1889（明治22）年に発行された北越商工便覧には、新潟市古町通二番町の田中徳治郎が営む官許測量器械医療器械製造所があり、ここは三島郡尼瀬町 鳥井安則支店でもあった。即ち、鳥井代五郎が尼瀬において製作した各種の医療機器類は、新潟病院に近い古町通二番町の店で販売されていたと考えられる。なお同じ町内には、小川勝二が営む大規模な医療器械製造工場と店舗があったことが同便覧にも記されている。この周辺は古くは神明町と呼ばれており、1850（嘉永5）年に出雲崎から流れてきた鍛冶屋の幸兵衛と機織りのお露という夫婦が小さな店を構えた所でもある。そこに近い小路は「ピンチャン小路」と呼ばれ、現在に至っている。

尼瀬の鳥井代五郎則安は明治晩年に北海道に移住し、その弟子、則光が後を襲っている。則光が製作するナイフ類は刃先が鋭利であることから「ピンチャンの刃物」と俗称され、出雲崎の名物となったそうである。

佐藤吉太郎は出雲崎編年史の中で、「新潟のピンチャン、出雲崎のピンチャン 時代を一にして符合せず」と述べているが、鳥井代五郎則安がピンチャンと称していたとの記録は残されていない。1913（大正3）年の日本全国商工人名録において、則光がピンチャンとの商標を用いていることから、縁者に関連して名付けられたであろう新潟の小路に使われていた名称を、後に則光が商標として用いるようになったと考えるのが妥当であろう。

1937（昭和12）年の三島郡誌によると、当時は3代目が事業を営んでおり、洋鋏を主として日産300挺生産していたとあるが、2018年10月時点では、同工場跡は更地となっている。尼瀬の高台にある海嶽山 光照寺は良寛和尚が出家した寺として知られているが、その本堂裏の一角に鳥井家累代の墓が1910（明治43）年5月29日に建立されている。